

## はじめに

千葉大学大学院社会科学研究院／人文公共学府 教授

水島治郎

本プロジェクトは「つながり」をテーマとして2020年度に結成された共同研究であり、3年の研究期間を経てここに報告書をまとめることができた。周知のとおりこの3年間は、新型コロナウイルスの感染拡大により世界が大きく揺らいだ3年であったが、奇しくもそれは「つながり」のあり方を根本的に再考する3年でもあった。

新型コロナウイルスの感染防止のためには、対人接触を減らすことが求められるが、そこでしばしば語られたのが、「社会的距離＝ソーシャル・ディスタンス（の確保）」だった。対人接触を避けるため、欧米諸国ではロックダウンにより強制的に人流を「断ち切る」ことがしばしば行われた。日本はロックダウンは実施しなかったものの、「自粛」を通じた人流抑制が一般的だった。いずれにせよ、人と人が「距離をとる」ことが「望ましい」とされたのである。

しかしながら、人文社会科学を学ぶわれわれにとって、そして人と人の織り成す関わりが基本となる「社会」を探究する研究者にとって、「社会的距離」をとること、「つながり」をなるべく断つことが望ましいとされる社会のありようは、そもそもの前提を崩すもののように思えた。人と人が関わるのが、双方にとって意味をもつどころか、感染を広げ、万が一の場合には自分や友人、家族に重大な身体的ダメージをもたらすのであれば、そんな「つながり」はなくてよい、そんな思いにもかられたのである。

とはいえこの3年は、そんな「つながり」の意味を再認識した3年でもあった。オンラインを含め、これまでと異なる形で「つながり」を維持しようという試みも多々あった。さらに「対面」でしか得られない、「出会い」の意義を感じることもあった。その意味でこの3年は、「つながり」を通じて歴史と社会を追究するわれわれにとって、またとない学びの機会を与えてくれた3年でもあった。

本報告書に寄稿された3名は、それぞれの角度からこの「つながり」を分析してきた。個々人を包摂する「つながり」には、同時に排除の機能もある。この両面を見据えながら、「つながり」の果たしてきた政治社会的な機能を明らかにすることが、多様な人々の行き交う現代世界の道しるべとなるのだと思う。「つながり」の学びを一つの飛躍の機会として、3名の皆さんの今後の一層の活躍を期待したい。